



林房雄「漢奸の娘」論：日中関係の理想と現実（特集 植民地と帝国の文化）

曹，天賜

(Citation)

綜合文化, 1:31-47

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100496700>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496700>



〔論文〕

林房雄「漢奸の娘」論

——日中関係の理想と現実——

曹 天 賜
(CAO Tianci)

はじめに

林房雄は1936年1月号の『文学界』に「日本文学に於ける今日の問題——魯迅のことによせて」を寄稿し、魯迅の「芸術的立派さ」が彼の「救国精神」と一体であると説いた。林はここで「[国民の精神を救ふものは、わが文学である]と、魯迅が、宣言する時、この宣言の前に愕然としない文学者が、現在の日本に果たして何人あるであらう」と、中国文学者の憂国の情を肯定し、日本文学におけるその欠如を批判している。ここから窺われるのは、ナショナリズムとその正当性を、日中両方の立場から認める林の思想である。林は、西洋列強の東漸に対抗するために、国民の精神の近代化を実現しようとするという「救国精神」、即ちナショナリズムを日本と中国がそれぞれに護持すべき理念と捉え、それを鼓舞する可能性を文学に求めていた。

日中戦争開戦前夜、林は評論「日本主義論争の鍵」（『文芸』1937年5月）において、「日本の長所と優秀性」の証左として、戴天仇の日本評価に次のように言及している。

今、僕の机上に戴天仇の「日本論」が載つてゐる。日本帝国主義の被害をうけること最も甚だしい隣邦支那の憂国者の書であるから、日本批判は不遠慮で且つ深刻であるが、日本の「マルクス主義的」評論家の如何なる日本観よりも、日本の長所と優秀性を認めて、公平であり光明的である。彼は日本の半世紀間の飛躍を事実として認めることからその分析を開始してゐるからだ。

戴天仇は『日本論』（外務省文化事業部、1932年4月）のなかで、日本人が「彼等ノ国体、彼等ノ民族ハ世界ノ何処ニ於テモ求ムルコトヲ得サルモノニシテ神ノ創造セルモノト信シテ居ル」ことを「迷信」として批判する一方で、彼らが「最モ熱烈真切ナル信仰的国民」であるがゆえに、中国人がしばしば陥る「自己利益ノ打算」を超えた「大我的生活」を造ることに成功したことを評価した。林の評論の主眼は、戴の『日本論』を通して、日本の「欠

陥と恥部のみが目につき」、日本の長所と優秀性を認めない日本知識階級の「敗北心理」を批判するところにある。ただ注目すべきは、林が論の前提として、日本への対抗意識を持つ中国側の憂国者の立場を認めていることである。

1937年8月13日、第二次上海事変が勃発し、日本と中国は全面戦争に突入した。二週間後の8月27日、林房雄は中央公論社の従軍記者として上海に赴き、翌月21日まで滞在した。日本人から物を買う中国人の打算的行為に、林は「これほど明瞭な漢奸的行動はないぢやないか」と疑問を抱き、「日本人に怒鳴られても顔色も動か」さない日本人食堂の中国人ボーイに「了解に苦しむといふよりあきれた」という¹。彼が中国に期待していたのは、日本に阿諛追従することではなく、日本に対抗するナショナリズムを発揮することだった。

林が1938年4月に『週刊朝日』で連載した小説「漢奸の娘」は、日中戦争における中国人の抗日意識、ひいてはそれを動機づける戦時下の中国側のナショナリズムの在り方への問いを主題化した作品である。本作では、第二次上海事変下の中国社会を舞台に、日本と密接な関係性を持つ親子三人が「漢奸狩」の被害者として登場する。本稿は、この三人の人物像と、日本における「漢奸狩」の言説に注目し、1938年11月に公開された映画版『亜細亜の娘』（新興キネマ、田中忠雄監督）でその国策性が際立つ要素も視野に入れつつ、本作が書かれた時期の林房雄の日中関係に関する問題意識を明らかにする。

1 映画版「亜細亜の娘」の問題性

林房雄が初出『牧場物語』のはしがきでも言及したとおり、小説「漢奸の娘」は「映画のために書かれた」作品である²。本作の映画版の制作が始まったのは、小説版の発表まもない1938年8月のことである。それに先立つ7月30日の打ち合わせでは、「[題名に用ひられた「漢奸」とは蔣政権下の用語であり、蔣政権を相手にせずといふ我が政府の建前から考ふる時、「漢奸」は日本人の用ゆべき言葉に非ず」といふ意見が出³て、「改めて題名審査の結果本篇の持つ大亜細亜主義の精神に即して新題名を「亜細亜の娘」と命名することに決定」したと新聞報道されている⁴。「漢奸」とは中国人からすれば裏切り者を意味する対日協力者を指す語であり、日本の映画のタイトルに用いるには不適切だと考えられた。

遡れば1925年、各道府県で行われてきた映画検閲を内務省警保局が統合するという内務省令が公布、施行された⁴。検閲手数料は当初、フィルム三メートルにつき金五銭とされたが、1937年4月24日から実施された検閲規則の改正によって、「外国製のフィルム検閲手数料を値上すると共に日本製の文化映画並に特殊の娯楽映画に対しては」免除することに決定した⁵。古川隆久が

¹ 林房雄「上海の性格」『経済マガジン』1937年11月→『戦争の横顔——文学者は戦線で何を見たか』春秋社、1937年12月

² 林房雄「はしがき」『牧場物語』第一書房、1938年8月

³ 「「漢奸の娘」題名ご法度——“亜細亜の娘”と改題」『東京朝日新聞（夕刊）』1938年8月1日

⁴ 「映画検閲 公布された内務省令」『東京朝日新聞（朝刊）』1925年5月26日

⁵ 「映画検閲規定変る」『東京朝日新聞（夕刊）』1937年4月25日

6

古川隆久『戦時下の日本映画』吉川弘文館、2003年2月

7

「亜細亜の娘」現地ロケ 逢初夢子の上海だより『東京朝日新聞(夕刊)』1938年9月28日

8

「内務省検閲係より発表されたる総説年鑑」『日本映画年鑑昭和十六年度版』大同社、1941年7月

9

「聖戦二周年記念——軍事映画を語る座談会」『文化映画』1939年7月

10

村上忠久「日本映画批評」『キネマ旬報』1938年12月

11

「六号記事：映画」『文芸春秋』1939年1月

指摘しているように、1937年4月の検閲規則改正の目的は国策映画制作を奨励することであり、ある映画作品が検閲手数料を免除されたということは、政府がその映画を国策映画と認めたということを意味した⁶。

「支那事変一週年記念映画」と銘打たれた「亜細亜の娘」は、陸海軍と中華民国維新政府から支援を受け、「迫真性を持たせるために中支上海方面に現地ロケーションを敢行」した⁷。「娯楽映画にして官庁に於てその主たる部分に付指導又は後援して制作せしもの」と云ふ理由によって、1938年度の検閲手数料が免除されたことは、本作がいかに「国策映画」の期待に沿うものであったかを物語る⁸。実際、軍当局は本作に高い評価を与えた。「軍人映画は段々よくなつて来ましたが、初めの間は各社共、軍事行動は実に下手で、特に射撃態度、兵の服装、号令、何れもどうも見るに堪へんものがあつた」が、「新興の「亜細亜の娘」の時は俳優と兵隊と殆ど区別のつかん位に出来て居り」、「是も軍事映画としていゝものと思ひましてなるべく斯う云ふ筋で斯う云ふものを作つて頂き度い」と、軍当局は呼びかけている⁹。

ところがこの映画は批評家には総じて不評であり、「之丈のスケールを持ち乍らその全てが十分の質量と幅とを出せなかつた」¹⁰、「成程この映画には外務省的イデオロギイが諸所に散見してはゐたが、そんな場所に眼がくらんで、脆弱な形式や御都合主義の物語やを見逃してはいけない」と批判された¹¹。

ここでは国立映画アーカイブ所蔵のフィルム「亜細亜の娘」より、その国策性が際立つ要素を指摘しておきたい。まず映画版では、主人公の素琴はいわば純血の中国人と設定されている。父の呉老人は彼女に向かって、「お前はアジアの娘でなければいけないのだ」、「アジアの娘になってくれ」という台詞を繰り返す。このような台詞は原作には見られない。中国人にとって「アジアの娘」であることは所与ではなく、求めるべき理想であるという日本側からのメッセージがここには潜んでいる。

作品の末尾では上海占領後、日本軍と共に次の攻撃に移った日本人記者・橘桂一郎が、素琴を上海に連れ戻すようにと、彼女を塚原大尉に託す。この場面も原作にはないものである。出発の準備をしている宣撫班の女性たちの姿を見た素琴は、「誤った支那の犠牲になった父や兄に代って、アジアの娘として、新しい支那のために、女として出来ることならどんなことでもやって行きたい」と塚原大尉に告げる。映画はこうした希望を語った素琴の笑顔をもって幕を閉じる(図1)。

追って検証するように、原作「漢奸の娘」においては、主人公素琴は日中混血児として造形されている。また、彼女が対日協力者になることは描かれてはいない。対して映画版においては、中国人の素琴が、日本軍に協力する意志を明示し、中国側から言えば「漢奸」に落ちぶれる道、日本側から言え



図1 「亜細亜の娘」のラストシーン(新興キネマ、1938年11月、国立映画アーカイブ所蔵)

ば「誤った支那」を正そうとする道を自ら選ぶ。こうして映画版では、「アジアの娘」になるという父から受け継いだ理想が、「漢奸」になることによって、つまり中国側のナショナリズムが日本側のそれに呑み込まれる形で実現されるのである。

このような映画版の結末は、小説版「漢奸の娘」が「亜細亜の娘」と改題されたことと呼応していると考えられよう。というのは、「漢奸」という言葉の抹消は、中国側のナショナリズムが消去された映画版の内容に見合っており、現実としての日中戦争の緊迫感も、両方を包摂する「亜細亜」という言葉によって希薄化されるからである。

以上のように、映画版「亜細亜の娘」の国策性は、中国側のナショナリズムに立脚するならば「漢奸」と呼ばれるような行為を、「アジアの娘」に相応しいものとして称賛するところに認められる。映画の設定やモチーフを参考にして原作小説を検討する際に浮かび上がってくるのは、原作の小説「漢奸の娘」が必ずしも当時の日本の国策には還元できない要素を含んでいる可能性であろう。以下、映画版との相違点に触れつつ、林房雄の原作がいかに国策性から逸脱しているかについて詳細に検討していく。

2 時代錯誤としての大アジア主義

作品は第二次上海事件勃発直前の「蒸暑い夕暮れ」の日、主人公素琴が、街路からの「日本人を殺せ」という群衆の叫び声を自宅で聞くとところから始まる。先に述べたように、彼女は日本人の母を持つ混血児である。

父である呉徳明老人に「なぜ、日本と中国とは戦ふのでせうか」と問いかけると、父は「孫中山先生の友がゐなくなつて、蒋介石の弟子が多すぎるからだ」と答える。すでに1925年に死去した初代中華民国臨時大総統である孫中山と、小説の現時点、即ち1937年八月初旬の中華民国総統である蒋介石を対置する呉老人は、日中衝突と中国人の対日感情の悪化の原因を後者の施政に帰している。彼は次のように続ける。

お前の身体の中には、支那と日本の血が流れてゐる。お前の美しい姿こそ、未来のアジアの姿だ。アジアは一つだ。これが孫中山先生の信念であり、わしの信念だ。同時に日本人の理想でもある。わしの血管の中には中国への愛情が燃えさかつてゐるが、日本への憎悪は燃えてゐない。これがほんとうの中国人の気持ちであるはずだ。だが、わしの信念は今の時勢には受け入れられない。(略) 現在の支那はヨーロッパにかきまはされてゐる。(略) だから、今のやうな騒ぎが起る。

12

岡倉天心『東洋の理想』聖文閣、1935年12月

呉老人の「アジアは一つだ」という言葉から想起されるのは、この言葉を冒頭に置く、岡倉天心が1903年にロンドンで出版した『東洋の理想』であろう。ここで岡倉は文明論的立場から、「アジア文明の博物館であり、而も博物館以上でもある」日本が「アジアの方法を保護し回復する」という役割を果たすべきだと唱えた¹²。

13

「大アジア主義 孫文氏演説」『大阪毎日新聞（朝刊）』1926年12月3日～6日

一方、本作では、「アジアは一つだ」という理念は、「孫中山先生の信念」として語られている。この設定は、孫文が1924年11月28日に県立神戸高等女学校で行なったいわゆる「大アジア主義」講演の内容を下敷きにしていると考えられる。孫文はここで、「日本と我国とのこの二国の結合、連繫」は「総てこの亜細亜の民族が歐洲民族に対抗して亜細亜民族の復興を関る」と説いた¹³。呉老人の言葉を通して、本作は日中両方に共有されるべき「大アジア主義」の「信念」を打ち出す。つまり本作で提起される「大アジア主義」は、アジアに対する日本の主導権を強調するのではなく、日本と中国の連帯関係、ひいては「平和」を目的とするものである。

しかし、呉老人自らも認めているように、このような「信念」は「今の時勢には受け入れられない」ものであり、「過去」の遺物にすぎない。その後、民衆に追われる日本人記者・橘桂一郎が、親子二人の前に闖入してくる。呉老人は彼を客として部屋に迎え入れ、桂一郎の父が孫文の旧友であることを知らされる。桂一郎の父は「日本に於けるわが中国の最良の理解者であり、アジアは一つなりといふ理想のもとに孫中山先生と心を許した心友」だったことに呉老人はこの場面で言及するが、その委細は、のちに素琴を通して桂一郎に送られた記念写真と呉老人の手紙において打ち明けられる。

この写真には「毛皮の外套をつけた孫文と羽織袴姿の橘桂介が並んで写っており、裏には「その両側の二人の紳士は戴天仇と何天炯である」という説明書きが付されている。呉徳明の手紙には、次のように記されている。

「わが孫中山先生は日本に多くの知己を持つてゐた。その中でも御尊父橘桂介先生は最も親しき友の一人であつた。

御尊父は熱烈なる南進論者であり、排英排米論者であつた。アジアは一つなりとの信念のもとに、人類の平等を主張された。世界の文化は人類の共有すべきものであつて、決して白人の専有に委さるべきものではない。世界をして平等たらしむるためには、トルコ、印度、支那の三大民族の完全なる独立をはかり、英米の覇権を打倒しなければならぬ。この信念のもとに、御尊父は孫中山先生の絶好の友として、その革命の事業のために、あらゆる援助を吝しまれなかつた。(略)」

周知のごとく、中国における帝政打倒と共和制国家の樹立に投身した孫文

は、日本と密接な関係を持っていた。その革命運動に直接に関与した日本人の同志として有名なのは、宮崎滔天である。まず中国で革命を実現し、そこを根拠地としてアジアないし世界の被抑圧民族の自由を回復するという彼の「一生の大方針」や、彼がシャム移民事業に携わった経緯などは、半自叙伝『三十三年の夢』（福永書店、1926年7月）に詳しい。呉老人の手紙で描かれる橘桂介という人物は、滔天をモデルとしていると考えられる。また、「トルコ、印度、支那の三大民族の完全なる独立をはかり、英米の覇権を打倒しなければならぬ」という橘桂介の主張は、前述した孫文の大アジア主義講演の内容とも照応する¹⁴。

桂一郎に渡された写真にも、モデルがあると考えられる。『頭山満翁写真伝』（頭山満翁写真伝刊行会、1935年11月）に載せられた一枚の写真である（図2）。「支那第一革命の元勳孫文氏が仮總統となつて後、頭山満翁と犬養翁を始め日本の恩人に謝恩のため来朝した時、秘書戴天仇氏と共に福岡に来り玄洋社墓地」で撮られたというこの写真からは、「毛皮の外套をつけた」孫文や「羽織袴姿」の宮崎滔天、そして戴天仇と何天炯の姿が確認される。本作では、大アジア主義を前提とする日中友好の可能性が、実在の人物と事件から諸要素を抽出して再構成する写真によって具象化されているのである¹⁵。

しかし重要なのは、「今日の情勢において、過去を語るのは無駄に似てゐるが」、「懐旧の情に堪へず、一書を呈する次第である」とあるように、手紙の書き手である呉老人がこの写真を、「過去」を「記念」する装置としてのみ扱っていることだ。言い換えれば、この手紙は、記念写真の存在によって、「過去」にある大アジア主義に基づく日中友好の可能性を喚起すると同時に、それと「現在」との関連性を切断しているのである。

また、桂一郎は、呉老人の前では「僕ら若い者が東洋の理想を身に体して、日支両国のこの割れ目を再びつぎなほさなければならない」と、大アジア主義的な理想を宣言していたが、この「含み多い手紙」を読んだときには、何の反応や思考も示していない。彼はただ「見事な筆跡の書箋を手にしたまま、しばらく茫然と」するばかりである。桂一郎のこのような無反応も、呉老人の「懐旧の情」も、本作の現在時では日中関係の回復を志向する大アジア主義が、日中対立の現状に敗北していることを仄めかしていると言えよう。

それに、「あなたにお会ひしたかつたからです」と素琴自らが述べているように、彼女がこの手紙を桂一郎に送るのも、桂一郎に好意を寄せているからであり、手紙や写真が物語る大アジア主義に共感したからではない。本作の冒頭で呉老人が「支那と日本の血が流れてゐる」素琴の「美しい姿こそ」が「未来のアジアの姿だ」と語ったことをも考え合わせると、彼女の態度は、彼女に象徴されるアジアの「未来」と、手紙で「過去」として書かれている大アジア主義との間にある距離を示していると言える。本作では、大アジア主

14

「大アジア主義 孫文氏演説」前掲。



図2 『頭山満翁写真伝』（頭山満翁写真伝刊行会、1935年11月、20頁）より。向かって右より、島田経一、戴天仇、何天炯、孫文、藤井種太郎、安永東之助の母とその遺子、宮崎滔天、中田猪十郎、佐賀常吉。

15

京都学連事件で起訴されて入獄した時期の書簡によれば（『独房書簡（1931年3月24日）』『文学放談 附・独房信』竹村書房、1934年9月）、林には『巨人頭山満翁』（政教社、1922年）を読んだ経験がある。林の明治史研究はこの時期から始まり、やがて『青年』で結実し、さらに1930年代後半に至って、『明治精神』を軸とする日本主義を高唱するようになる。このような事情を踏まえれば、林が1935年11月に刊行された『頭山満翁写真伝』を読んだ可能性が高いと言えよう。

義をもって日中両国を結びつけるという発想は、過去の一部にすぎないもの、現在とも未来とも接続できない時代錯誤なものとして語られているのである。

3 「漢奸」と「漢奸狩」

タイトルも示す通り、本作のキーワードは「漢奸」である。王柯の考証によれば、「漢奸」という言葉は、『史記』から『明史』までの中国の「正史」とされている『二十四史』の中に「は見出せないが、その概念は、道光時代（1821～1850年）中期以降の帝国主義による中国侵略にともない、「中国と外国との関係において「外国に協力する者」へと変わった」という¹⁶。外国との対立関係のなかで自国を守ることの正当性を前提とし、それに反する者は「奸」として批判されるべきであるというナショナリスティックな思考様式が、この「漢奸」という語には伏在している。

日中戦争が全面化した後、1937年8月23日に中華民国政府によって公布された「懲治漢奸條例」では、外国に協力して自国に危害を加える者が「漢奸」と規定されている¹⁷。この場合、「漢奸」とは対日協力者と同義であると言ってよい。特に日中戦争初期には、民衆の抗日意識を喚起すべく、当時の中国の新聞紙が漢奸の逮捕や処刑を盛んに報道していた。例えば1937年8月17日の『申報』に掲載された「漢奸已到死路」という記事では、漢奸の二人が殺され、七人が逮捕されたことが報じられている。一方、民衆の暴力的行動によって、無実の人が巻き込まれたこともある。1937年8月24日の『大公報』に掲載された「華僑程劉二醫師被誤認為漢奸遭人兇毆遍體鱗傷救災會昨專函慰問」という記事では、二人の医師が背丈が低く、短い髭を蓄え、中国語を上手く話すことができないゆえに、漢奸だと誤認されて二十余人に暴行されたことが報道されている。

他方、戦時中の日本のジャーナリズムは、「漢奸」に対する中国人による暴行事件が頻発したことを強調し、それを「漢奸狩」と名付けて、「同胞殺戮の惨事」¹⁸、あるいは蒋介石政府の「国民に対する恐怖政策」として宣伝した¹⁹。日本側の報道は、侵略と反侵略という国際関係の問題を、権力と民衆の対立という中国内部の問題に置き換えたと言える。このようにして「漢奸」という言葉に内在しているナショナリスティックな思考様式、言い換えれば抗日の正当性は隠蔽され、国民政府の凶暴性だけが際立てられたのである。

本作において、「漢奸」という言葉が最初に使われるのは、ヒロイン素琴の兄・徳熙が保安隊隊員たちを連れて家に帰り、桂一郎を逮捕しようとする場面においてである。桂一郎を守ろうとする呉老人を、徳熙の同僚である范少尉は「日本人をかばふものは漢奸だ」、「呉徳明先生はまさか漢奸ではござい

16
王柯「『漢奸』考」『思想』2006年1月

17
「懲治漢奸條例」『戦時法律概要』軍事委員會戦時工作幹部訓練團第一團政治部、1938年6月

18
『時局解説百科要覧』平凡社、1937年11月

19
『支那事变実記 第13輯』非凡閣、1938年9月

ますまい」と脅かす。日本に協力して中国に危害を加えていないにもかかわらず、桂一郎の無罪を主張するだけで「漢奸」と疑われ、結局范に漢奸として殺害された呉老人とその家族は、本作において「漢奸狩」の被害者として造形されている。この場面で呉徳明を脅かし、後に「漢奸狩はすでに始まっている」、「あなたが身の安全を欲するなら、道はただ一つ、僕と結婚することだけだ」と素琴を威嚇する范少尉は、私欲を満たすために、「抗日」を大義名分として同胞を殺害する「漢奸狩」の実行者の典型である。

作品の序盤では、「漢奸」という言葉に言及されるのは、中国人同士の対話においてのみである。第二次上海事変勃発後、「午後四時、支那軍は一斉に攻撃を開始し、わが陸戦隊本部は集中砲火の的になった」（傍点引用者）とあるように、語り手は情勢の推移を帝国日本の立場から語るようになる。「日がたつて、支那側の敗戦が明らかになるにつれて、漢奸狩は狂暴性を増やしてきた」、「一人の密偵が発見されると、そのまはりに居合わせた十人の良民が殺される」、「私怨をはらすための密告も行はれて、誰彼の見境もなく、単なる噂だけでも、抗日テロ団の犠牲になった」というような記述もある。こうして当時の日本ジャーナリズムの方向性に与する語り手は、中国人同士の殺し合いを強調することで、中国人としてのナショナリスティックな連帯意識を消去している。

しかし、呉老人と素琴は、「中国の民衆のために働くことを選ぶ。素琴は「仏租界のドイツ人経営の病院」で「支那傷病兵」を看護し、呉老人はまだ日本に占領されていない南市にいて、「避難民救済会の幹部として働く」き始める。ここに見られるのは、「漢奸狩」の被害者がいまだ保持している中国人としての連帯意識であろう。このようにして、「漢奸狩」という事実に対して、語り手によって提示される日本ジャーナリズムの方向性と相反する解釈は、その被害に見舞われようとしている中国人当事者の行動によって呈されているのである。

本作では呉家の親子三人と范少尉との衝突のほかに、もう一つの「漢奸狩」事件が語られている。黄郭の死である。実在するこの人物が直接に登場するわけではないが、本作の序盤、范少尉は「前政務整理委員長の黄郭氏なら、札つきの知日派で和平論者ぢやありませんか」と言及している。第二次上海事変が起こった翌月、桂一郎は塚原大尉から、「フランス租界の自邸」において「黄郭氏の家族が殺られた」ことを知らされたという。しかし実際にはすでに、黄郭は1936年12月3日に上海で死去していた²⁰。つまり、彼が本作の現在時、即ち1937年9月ごろの上海で家族とともに「支那側」に漢奸として殺されるという挿話は、端的に事実と反しているのである。

済南事件や「北支停戦協定」の交渉に関与し、中華民国政府の重鎮だった黄郭の言動は、日本の新聞紙上でもしばしば報道されており、一定の知名度

20

『朝日新聞』には1936年9月1日の「黄郭氏重態」、1936年11月25日の「黄郭氏、危篤再起は絶望」と1936年12月4日の「黄郭氏逝く」という三つの記事があり、『読売新聞』と『毎日新聞』も黄郭の死を報道している。

を有していた。1936年12月4日の『大阪毎日新聞（朝刊）』の「黄郛氏 日本通の大立物」という記事は、彼が死去したのは「仏国租界の自邸」においてであること、「多事多難な時局に善処した」この政治家が「支那からは親日派の巨頭のように見られ一時は民衆から色眼鏡で見られてゐた」ことに言及している。本作で語られる、「フランスの租界の自邸で」殺された「札つきの知日派」という「黄郛」の人物像には、この記事の内容と重なるところがある。

黄郛に即して見れば事実に反するこの挿話は、1937年8月26日、行政院秘書・黄濬が漢奸として処刑された事件に基づいていると考えられる。同年9月22日の『読売新聞』に掲載された記事「発狂した支那」では、黄濬が漢奸容疑で銃殺された翌日の『申報』の記事「京槍決漢奸黄濬等 各犯犯罪之事實 受敵利用出賣情報 一律槍決大快人心」が引用され、「樹に吊す漢奸の梟首台」の図も「上海南市所見」として展示されている。「南市は漢奸狩の最も猛烈な地域であつて、籠に入れた漢奸の首が公然と路傍の棚の上に晒されてゐる」という本作の叙述を考え合わせると、「漢奸狩」にまつわる上の挿話を創作するにあたって、林はこの記事を素材とした可能性もあると言えよう。

「黄郛の死」を知らせられて、桂一郎は次のように塚原大尉に問いかける。

「黄一家に漢奸的行動があつたのですか。」

「あるはずがない。抗日戦争の無謀を説いたことはあるかもしれぬ。ただそれだけで一家を襲殺するのだから、支那側もいよいよ血迷つて来たね。正義の士を全て漢奸扱ひにするやうになつては、もうおしまひだ。」

桂一郎は「黄郛の死」を知らせられると、まず彼に「漢奸的行動」があつたのかどうかを確認しようとする。この反応には、「漢奸的行動」があるなら処罰されるのも納得できるという桂一郎の意識が伏在している。塚原大尉の解釈を聞いた桂一郎は、それに同意を示さずに、「呉徳明氏はどうでせう」と、自分の「気にかかつてゐたこと」だけを口に出した。このように、「黄郛の死」という「漢奸狩」事件を当時の日本ジャーナリズムの方向性で論評する塚原大尉とは異なり、桂一郎が関心を寄せるのは「漢奸」という言葉自体と、そこに内在しているナショナリスティックな思考様式である。要するに、本作は「漢奸狩」事件を下敷きにしつつも、それに対する日本ジャーナリズムの解釈を相対化する契機を孕んでいる。これを前提として、呉家の親子三人と中国のナショナリズムの問題が立ち現れてくるのである。

4 中国のナショナリズム

素琴は8月11日の夜、桂一郎に記念品と手紙を渡して家に帰る途中、兄徳熙に共同租界まで連行される。翌12日、塚原大尉とその部下たちに救い出された素琴は、「私は日本と戦ふことを望みませんでした」と桂一郎に告げている。彼女の立場は、日中戦争という現状があるなかで時代錯誤となった孫文流の大アジア主義を唱え、日本軍との交戦を避けようとする父の方に近いのである。

さらに翌13日、第二次上海事変が勃発し、素琴は父とカセイホテルに避難する。それを知った范少尉は、素琴の部屋に侵入し彼女を犯そうとするが、行方不明になっていた徳熙が現れ、制止する。続けて、親子三人が口論を始める。徳熙からの抗日の命令を「それだけはお許してください」と素琴が拒むと、范少尉は「君の妹は中国よりも日本を愛してゐるのだ」と得意気に笑う。

「いいえ、ちがひます。」素琴は必死に答へた。「私はアジアの娘です。心から中国を愛してゐます。ただ密偵になることは厭だと言つただけです。私は中国の民衆のために働きます。父と一緒に南市へ行き、傷病兵と避難民の世話をするのです。」

「うむ。」呉少尉は腕組みをした。「さうか。お前はそんなことを考へてゐたのか。」

「徳熙！」呉老人の声がした。(略)「素琴の希望をかなへてあげなさい。戦ひはまだ続くだらう。中国のために尽くす道は色々ある。(略)お前の信ずる道に於いて戦ふがいい。だが、私と素琴が傷病兵と避難民のために働くことを妨げてはいけない。」

「お父さん、よく解りました。(略)では、どうぞ、わが中国の民衆のために働いて下さい。私は、これ以上何事も申し上げません。」

ここでは「アジアの娘」と自称する素琴が、「中国よりも日本を愛してゐる」ことを否定し、両国を等しく愛そうとする意志を表白している。日本への心情を自制し、「心から中国を愛してゐます」とだけ口にするのは、范の脅威から自分を守るためであろう。一方、呉老人は、徳熙が強く主張する抗日の理念をも、「お前の信ずる道において戦ふがいい」と認めている。この場面では、三人に通底している中国人としての救国意識が、抵抗と支援の両方から汲み上げられ、家族が和解する契機となっている。アジアを愛することと中国を愛することは矛盾しない。しかし、日本との関係性という問題はこの場から排除され、あるいは、棚に上げられているのである。

その後、傷病兵と避難民の世話を始めた素琴と父は、范の罠にかかってし

まう。結局、呉老人は范に射殺され、呉兄妹は父の首を奪い去って龍華寺の墓地に埋める。そして、兄妹は「避難民を装って民家の一室に匿れ」、「部屋にこもつたきり、一步も外に出ることができな」い状態に置かれ、「徳熙の顔の憂愁と焦躁は日に日に濃くなつ」てゆく。

「俺はもう蒋介石の勝利は願はない。だが、中国の壊滅を黙視することはできない。」

だが、今更戦線に帰ることはできなかつた。文字通りの漢奸となつて日本軍に通ずることは、彼の良心と軍人魂が許さぬ。外国に亡命しようにも、手段がない。

ここでは「中国の壊滅を黙視することはできない」という徳熙の苦悩が語り手によって代弁され、中国を侵攻してくる「日本軍に通ずること」、即ち、外国に協力して自国に危害を加えて「漢奸」になることが「良心と軍人魂が許さぬ」行為として語られている。こうして中国側の「良心」、つまりは抗日の正当性が顕在化してくるのである。その後、生き延びるために、徳熙は素琴を連れて南市から脱出しようとする。「鉄道線路伝ひに北に逃れる避難民」の「群れにまぎれ」るための準備として、「兄は顔に煤を塗り、従者の着る服をまと」い、「妹は化粧をおとして、破れたマントをすつぱりとかむつた」。

日中戦争が全面化した後、日本のジャーナリズムは「皇軍」が中国の避難民に対していかに情け深いかを広く報道した。例えば、1937年11月19日の『朝日新聞』には、「日章旗を翻して我家に戻る浦東の住民」や、「皇軍嘉定占領後安心して城内に帰る住民」の写真が掲載され²¹、同月24日の夕刊にも、「飢餓戦線に彷徨ふ支那民衆実に四千名が皇軍に守られて救出保護されて生活の安定を得やうとする明朗な話」が見られる²²。本作では、桂一郎が原田伍長の通訳として、「領事館警察と協力して、北区一帯の支那人を安全に避難させるやうに取りはからへ」という塚原大尉の命令を受け、「任務を果たし得た喜びにほつとし」たという出来事は、「皇軍」の厚情の表れとして読み取れる。映画版「亜細亜の娘」においても、兄妹は「皇軍」の保護下にある避難民として描かれた（図3）。しかし原作では、素琴兄妹は避難民ではなく、「皇軍」の保護に従わない存在として造形されているのである。

ここから生じてくる日本側との距離は、二人の結末に繋がっている。南市から逃れる途中、兄妹二人は范少尉とその部下たちに取り囲まれてしまう。范を殴り倒し、素琴をかばいながら密偵たちを撃ってゆく呉徳熙は「妖しい薄笑ひ」を浮かべている。

「犬奴！日本軍を撃つために鍛錬した俺の射撃を、こんなことに役立た

21

「蘇る安堵の表情 避難民続々帰る」『東京朝日新聞（夕刊）』1937年11月19日

22

「飢え彷徨ふ支那民衆四千名・皇軍に縋がる 嘗ての留学生が先達」『東京朝日新聞（夕刊）』1937年11月24日



図3 映画版「亜細亜の娘」より。素琴兄妹は避難民の一員として設定されている。

せたのは貴様だ。腐りはてた偽愛国者だ！」

徳熙の眩き声が終わらない前に、一斉射撃が起つた。銃声を聞いて駆けつけて来た正規兵が徳熙を狙つたのである。徳熙は胸を押へて煉瓦塀に倒れかかった。五本の指の間から血がしたたり落ちた。彼は唸つた。

「これでいい……これでいいのだ。俺は…父の側に帰る。素琴、父は……正しかつた！」

注目されるのは、「父は……正しかつた！」という徳熙の遺言である。この一言の意味を明らかにするには、作品序盤における父子の口論を読み合わせる必要がある。呉老人が桂一郎を逮捕することに反対したのは、現下の情勢では「日本を刺戟するやうなことは、支那の愛国者はつとめて避けなければならない」と考えたからであつた。父の態度を、徳熙は「あなたは日本を恐れすぎてゐます」と評し、「日本の如何なる威嚇をも、我々は実力をもつてはねかへすことができます」と、中国の実力への自信を宣言するが、呉老人は「蒋介石の夢」にすぎないとの疑念を示していた。親子の認識が食い違っているのは、日中両国の実力の差、即ち抗日の可能性についてであり、その正当性についてではない。父子が和解した場面で、呉老人が「お前の信ずる道において戦ふがいい」と語ったことからわかるように、彼は息子の抗日の意志そのものを否定してはいない。このように徳熙の遺言も抗日の正当性を否定するものではなく、むしろそれを強調する表現として読むべきである。

この場面で徳熙の顔に浮かぶ「薄笑ひ」は、范への軽蔑と自分の射撃への自信の表れであろう。窮境に陥った徳熙は、密偵たちを「照準は正確で一発ごとに敵を倒し」、その首領である范をも「一発のもとに射止めた」という。徳熙のこうした英雄的な姿は、「道傍の溝の中にくろげこんだ」范と対照をなしており、「腐りはてた偽愛国者」とは正反対の本物の愛国者のイメージがここから現れてくると言える。たしかに、抗日を強く主張する徳熙が中国人同胞に殺され、最後に父の正しさを認めるという設定自体は、日中両国の実力の差を際立て、中国の抗日の可能性を解消するという意味を持つ。しかしながら、最期まで到底「文字通りの漢奸」にはならなかった彼の死に方は、むしろ抗日の正当性を示唆している。本作ではこのように、中国側のナショナリズムが実力とは無関係な抵抗の論理として表出されているのである。

5 日中関係の理想と現実

呉家の親子三人が巻き込まれた「漢奸狩」を物語の軸とする本作では、事件に注目する日本側の視点も備えられている。それを担うのは、職業軍人の

塚原大尉と新聞記者の桂一郎である。

呉徳明が殺害されたあと、「和平論を唱へ治安を攪乱したる漢奸呉徳明の死骸は南市聖天病院付近の廃寺の墓地にて発見され、首を街頭に曝された」という。「塚原大尉の投げ出した漢字新聞」でそれを知った桂一郎は、「こんな事があり得るのだらうか」と呟く。これに対して、塚原大尉は次のように述べている。

「あり得るかもしれぬ。蒋介石の恐怖政治の破綻だ。督戦隊だとか漢奸狩だとか、あまりに無理が多すぎる。戦線でも兵士は督戦隊に発砲してゐるぢやないか。銃後の恐怖政治にも、民衆は当然反抗するさ。」

「さういへば、呉徳熙少尉は硬骨で正義感の強さうな青年でした。」

「だから、父が無実の罪で処刑されたのを見ては、じつとしてをれなくなつたのだらう。それにしても、軍職を抛つて父の首を奪ひ去つたとは、思ひきつたことをやつたものだ。」

「南市への進撃はいつです？」桂一郎は決然と訊ねた。

「まだ解からぬ。」

「大尉、約束して下さい。進撃の日には必ず僕をつれて行つて下さい。あなたが二人の部下の死骸を探すなら、僕は呉徳熙君と素琴の死骸を探しませう。」

ここで塚原大尉による「漢奸狩」の解釈は、これを「蒋介石の恐怖政治」の所産と見るものであり、日本系のジャーナリズムと方向性を同じくする。桂一郎の「あなたが二人の部下の死骸を探すなら」という言葉は、「部下の軍曹と通訳が行方不明になつた」事件と繋がっている。この挿話は1938年8月12日の大前旭憲兵軍曹と熊野敏夫憲兵通訳の行方不明事件をモデルにし、塚原大尉のモデルは、この二人の部下の捜索に奔走した塚本誠である²³。

林房雄は「帰らぬ憲兵」において、塚本大尉に関する「両部下探して3ヶ月 憲兵大尉一番乗に秘める悲話」という新聞記事を引用し、上海滞在中における彼との交友を紹介した。このエッセイを執筆した背景には、「筆をとる機会の多い君であるから、何らかの形で、この事件の真相を公の場所に発表しておいてくれないか」という塚本大尉との約束があるが、それを果たす契機となつたのは、「皇軍」の結束を物語る塚本大尉自身の行動であるという²⁴。ところが、「漢奸の娘」が焦点を当てるのは、林が塚本大尉に見ていた「皇軍」の結束ではない。本作において、日本軍が南市に突入した時、最初に戦車から降りてきたのは、部下を思う日本軍の軍人ではなく、記者の桂一郎なのである。

ここで注目されるのは、桂一郎が徳熙を「硬骨で正義感の強さうな青年」

23

「両部下探して3ヶ月 憲兵大尉一番乗に秘める悲話」『東京朝日新聞（朝刊）』、1937年11月13日

24

林房雄「帰らぬ憲兵」『戦争の横顔——文学者は戦線で何を見たか』春秋社、1937年12月。初出未詳。

と評価している点である。呉老人の邸宅では、徳熙は「そいつは日本人ですよ」、「東洋鬼ですよ」、「溝からはひだした犬のやうな恰好だ」と桂一郎を敵視していた。にもかかわらず、桂一郎は徳熙への好感を表明しているのである。目下の情勢について、「戦ひが始まれば、僕は飽くまで日本人の一人として戦はなければならない」という桂一郎の覚悟と、「日本の如何なる威嚇をも、我々は実力をもつてはねかへ」そうとする徳熙の態度は、日中両方のナショナリズムの相剋関係を暗示する。だが、徳熙への桂一郎の好感から浮上してくるのは日中両方のナショナリズムを平等に認める考え方である。

作品の末尾、素琴は「崩れるやうに塀の前に倒れた兄の姿」を目にすると、「叫び声をあげて塀の前に飛び出した」。彼女は、「兄を倒した同じ銃弾の的にならうと」考え、「兄の死骸の前に胸を張つて立ち、飛来する銃弾を待つて、静かに両眼を閉じた」。その後の光景について、語り手は素琴に焦点化して次のように語る。

激しい銃声が始つた。彼女は眼をあげなかつた。銃声は十倍の激しさで続いた。(略)彼女の神経は全く消耗されたやうであつた。不思議な恍惚状態の中で、彼女は胸に喰ひこむ銃弾を待つた。銃声は続いた。この長時間の銃声は何を意味するか、それを判断する力も、もう彼女にはなくなつてゐた。

銃声がぱたりとやんだ。恐ろしい地響を立てて、何物かが彼女の前に近づいて来た。夢から醒めた人のやうに素琴は眼をあげた。おぼろな視力のなかに、行進する戦車隊の姿が見えた。戦車は日章旗をひるがへしてゐた。素琴は半ば無意識のままよろよろと二三步前に進み出た。

戦車隊は素琴の前を囂々と進んで行つた。だが、彼女の耳には、その声も聞こえず、その厳めしい姿もただ一枚の影絵のやうに見えた。茫然と立ちつくしてゐる彼女の前に、何台目かの戦車がピタリと止つた。

戦車の中から一人の日本人が飛び出して、何事か叫びながら近づいて来た。(略)それが橘桂一郎であることがわかつたとき、素琴は初めて鋭い叫び声をあげ、そのまま気を失つてしまつた。

ガーデンプリッジで別れを告げた際、桂一郎は素琴に、父に「お会ひになつたら、日本軍は決して支那の良民の敵でないことを、あなたの目で見たとほりにお伝えください」と告げていた。結末のこの場面に至って初めて、素琴は自らの目で日本軍を見るのだ。

父と兄に冤罪を着せて殺害した密偵たちを殺し、彼女の命を守ったことは、日本軍が「支那の良民の敵でない」ことの証拠であろう。しかしここでは、「この長時間の銃声」が日本軍による密偵たちの射殺を意味することを素琴は

認識していない。彼女の目に映るのは、「ただ一枚の影絵」のようなもの、即ち日本軍の侵攻の虚像である。密偵たちを射殺した「戦車隊は素琴の前を囂々と進んで行つた」といった戦場の実像を語り手が提供しているのは、日本側の読者に対してのみである。

戦車から降りてくるのが桂一郎であることを認めた直後、「鋭い叫び声」をあげた素琴が気絶するところで本作は幕を閉じる。この結末は確かに、映画版で描かれたような、素琴が桂一郎に助けられるという事後の展開を読者に想像させると考えられる。換言すれば、日本軍が中国民衆の敵ではなく、むしろ悪い同胞から彼らを守る「救い」であることを、日本人である桂一郎の言動を通して読者に示している。しかし同時に、これを素琴自身が目撃すること、認識すること、そして体験することを、本作は拒否しているのだ。この構図が仄めかすのは、日本軍の侵略と一体化している日本側のナショナリズムと、素琴の志向するアジアの未来との断絶であると考えられる。このようにして本作は、日本の中国侵攻という現実が、彼女が象徴する日中の「友好」や「融合」の理想とは矛盾するものであるという、当時の日本のプロパガンダとは相容れない時局認識を浮上させるのである。

おわりに

1938年11月、日中戦争が長期持久戦の様相を見せ始めたため、日本政府は「帝国の冀求する所は、東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設にあり」と宣言した²⁵。いわゆる「第二次近衛声明」である。近衛文麿のブレーン集団である昭和研究会の一員である蠟山政道は、「支那の場合におけるナショナリズム」の「過誤」として、「東洋地域に如何なる変化を惹起し、他の東洋民族に如何なる運命を齎すかについて、充分の省察を有たなかつたこと」ことに加え、「西欧帝国主義の援助の下に隣邦日本と衝突する原因を作つたこと」を挙げ²⁶、「如何にせば支那における誤れる反日抗日の民族主義的潮流を是正し得るやの問題」が、「東亜協同体論の発生的基調」となつたと述べている²⁷。同じく昭和研究会の一員である三木清は、東亜共同体を「民族的全体でなくて民族を超えた全体」と規定し、「その結合の基礎は血といふ如き非合理的なものではなく、東洋文化の伝統といふ如きものでなければならぬ」と論じて、歴史と文化の中に「民族を超えた」全体の合理性を見出すことの必要性を説いた²⁸。このように、日中両国の対立関係とそれをもたらしているナショナリズムを超克することは、当時の東亜協同体論者の共通の懸案であつた。

本作に登場する日中の大アジア主義者の主張には、「日支人の結婚がもつと奨励されていい」という桂一郎の構想や、日中混血児であることが娘を「ア

25

「国府を改替更生せば 敢て参加を拒否せず
帝国不動の方針声明 東亜新秩序建設へ」
『東京朝日新聞（朝刊）』1938年11月3日

26

蠟山政道「東亜共同体の理論」『改造』1938年11月

27

蠟山政道「東亜協同体の理論的構造」『アジア問題講座（第一巻）——政治・軍事篇』創元社、1939年3月

28

三木清「知性の改造」『日本評論』1938年11～12月

ジアの娘」、「アジアの未来の姿」たらしめるという呉老人の執念に見られるように、三木清のいわゆる「血といふ如き非合理的なもの」が底流している。しかし小説は主人公の気絶をもって結ばれ、血統を通して日中連帯に到達できる可能性さえ閉ざされてしまう。ここで一貫しているのは、「漢奸狩」事件を通して、その被害者である中国人と当時の日本ジャーナリズムの両方の立場から描出された、中国側の救国精神＝ナショナリズムの正当性と持続性である。このように、本作の執筆の段階では、林はナショナリズムの超克に基づく「アジア」という共同体の構築を、すでに断念していたと考えられるのである。

林は座談会「支那問題座談会」（『商工経済』東京都商工経済会、1938年5月）では、西郷隆盛や「孫文と日本の軍人、政治家との関係」を例証とし、「日本と云ふものを守る為に、どうかして支那を一つの独立国、或は両国的に考へても、日本の一つの保障、生命線としてどうかして意義あらさなければならぬ」という「日本の伝統政策」には、「常に一つの理想があつた」と説き、中国の知識人「チョーインセン」との議論を振り返って次のように述べている²⁹。

それでチョーインセンと議論をして居りますと、「日本と協力したいが、侵略だけは止めて貰ひたい」。「侵略でない、或は兵力を使へば侵略であるかも知れないが、それは斯う云ふ事情で嫌でも兵力を使はなければならぬ」。「ぢやお前は侵略を肯定するのか」と短い議論では水掛論になる。

だがさう云ふ話を段々して居れば、向ふが分つて呉れる。先つき御話のやうに老人連中はよく分つて呉れるが、若い者が分からないと云ふ話がありましたが、老人連中には日本の伝統政策に対する理解が残つて居るだらうと思ふのです。

上に語られた「日本の伝統政策」に対する理解の世代間の断絶は、本作の呉家親子の時局認識の食い違いと重なる。林自らが語っているように、「老人連中」が理解できるのはあくまでも日本の「伝統政策」であり、日本政府の目下の方針ではなかった。明治以来の歴史から日本の対中国政策の理想を汲み取り、その正当性を説く林が、日中戦争という現状について中国側の知識人に向かってできるのも、「兵力を使へば侵略であるかも知れないが」、「嫌でも兵力を使はなければならぬ」というような無理筋を説くことでしかなかった。

林はこの座談会では「支那を独立国にして、支那を同胞国にすると云ふ理想」を説き、それを「詳しく小説にでも書いて行きたい」と述べた。だがこの時期、彼が「漢奸の娘」で描出しているのは、日中戦争という「現実」に

29

「チョーインセン」とは、日提携映画と銘打たれた「東洋平和の道」（東和商事映画部、1938年4月）の脚本を担当し、その制作のために主演女優たちと一緒に1938年2月1日に来日した「張迷生」である。「張迷生」は、1920年代末期から1940年代初期まで北京で文筆活動をしていた台湾新文学運動の旗手、後の第一回、第二回の大東亜文学者大会に参加した張我軍のペンネームである。

取り囲まれている、日中両方のナショナリズムの譲歩不可能な在り方であり、言い換えれば、このような理想が実現できない様相である。林が日中戦争の現実には背を向けて、日中両方をはじめとする東亜の諸民族が「共存共栄」するという純粋な理想そのものを描く機会を得るには、それが実現するさまを確認した約半年後の満洲旅行を待たなければならなかったのである。

*「漢奸の娘」の引用はすべて『牧場物語』（第一書房、1938年8月）に拠る。引用に際して旧字は新字に改めた。また、映画版「亜細亜の娘」の視聴とコマ抜き画像の使用にあたっては、国立映画アーカイブの協力および許諾を得た。なお本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム（JPMJSP2148）の支援を受けたものである。

（神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程／日本近代文学）